



TITLE:

<雑録>蒙疆だより

AUTHOR(S):

みづの, せいち

CITATION:

みづの, せいち. <雑録>蒙疆だより. 東洋史研究 1943, 8(1): 53-53

ISSUE DATE:

1943-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/145777>

RIGHT:

齋場に於けると同様こゝでも無宗教に依る告別式であつた。曹汝霖・阪谷希一・伊藤武雄氏等が葬儀委員長として、自宅で執り行はれた。初秋と云ふには稍々暑さを覺えたが、丁度この日はすがすがしい好天氣であつた。院子の北側に立派に祭壇が設けられ、あたりは生花で一杯だつた。この告別式は曾つて北京では見る

ことの出来なかつた清楚さを持ち且つ充實したものであつたであらう。會葬者の内には岡村司令官・安達參謀長・北澤總領事・松崎鶴雄先生なども交つてゐた。鈴江言一氏も上海からはる／＼來られ、山西潞安の奥からは今田大佐の切々たる長文の弔辭が寄せられてゐた。(十七、十二、五)

蒙 疆 だ よ り

××君

大同の東、陽高縣のみなか、古城堡で漢代の古墳を調査してゐます。

こゝは天鎮縣の安家皂にちかく、宿舍は安家皂の警察署にとり、毎日二支里の道をかよつてゐます。

このまへ、漢代のあなぐら考を書きましたのでこゝでもあなぐらに注意しましたが、みんなおなじやうな馬鈴薯の貯藏處で、こゝでは山窖^{サンヤウ}とよんでゐます。むかしのまゝ窖とよんでゐるのがうれしいのです。

山藹はいふまでもなく馬鈴薯のことです、それ以外にあなぐらはありません。白菜の貯藏もあまりせぬやうです。そして穀物はといふと櫃^{クハ}とか缸^{カン}とかに貯藏するやうです。非常に多量だと地上に倉庫をつくるといつてゐますが、地下に藏することはなさうです。それにいつたい山藹といふものは近年の栽培なので、この山藹窖がどう古いあなぐらに連絡するかはちよつとわかりません。いづれまたよそのやり方をしらべるうち

にわかつてくるだらうとおもひますが、このあたりの習慣では山藹しかありません。

あなぐらのはなしになると、小野君は萬安の堅穴をあなぐらとみるわたくしの説に大反對だといつてゐます。反對説があればあるほど、わたくしがあの一文を草した値うちが出るわけでよろこんでゐます。「なんだあんなわかりきつたこと」といはいれないかと心配してゐたのです。皆さんよろしく。

陽高古城堡にて

十月六日

みづの・せいち